平成29年３月１日

校長会 みえ No.45

三重県小中学校長会　広報　第45号

●発行●三重県小中学校長会 津市桜橋 2-142　三重県教育文化会館内　TEL 059-227-7011　E-mail　info@mie-kochokai.com
●編集●三重県小中学校長会　広報委員会　●印刷●光出版印刷株式会社 松阪市久保町 1885-1　TEL 0598-29-1234

私の学校づくり

持続可能な未来を拓く「ありがとう」の学校

名張市立薦原小学校
校長　谷戸　実

「昭和の香りがする学校ですね」

初めて本校を訪れた方の言葉です。

本校校区は、名張市北西部の奈良県境に接し、山に囲まれた自然豊かな農村集落と、本校在籍の約七割の児童が住む新しい住宅地、市内最大の工業団地から構成されています。

学校はその農村集落の高台に位置し、山や川などの自然や田畑に囲まれ、近隣の里山には市天然記念物のギフチョウの保護区があり、その生態を観察する学習を毎年進めています。

地域全体が、学校や子どもたちの活動に大変協力的であり、市民センターや保育所も学校と同じ敷地にあり、いつも顔が見られる環境にあります。

「ありがとう」の学校十年

本校は、十年前から「ありがとう」の学校を教育目標に掲げて教育活動を推進してきました。「ありがとう」という感謝の気持ちをベースに「あ」挨拶ができる人」「り」りこうな人」「が」頑張れる人」「と」ともだちも自分も大切にする人」「う」運動ができる人」です。

覚えやすい目標を活かし、たえず教職員や子どもたちにも意識化・実践化ができるようにしてきました。

ユネスコ・スクールとして

四年前にユネスコ・スクールに加盟しました。その年に全国ユネスコ・スクール奈良大会があり、参加する中でユネスコスクールがＥＳＤ（持続可能な社会を作るための教育）を推進していることを知りました。これは本校の強みが活かせる教育活動だと感じました。次年度から、ＥＳＤの視点を取り入れた教育を進め、学校全体がＥＳＤという一つのベクトルに向かって力を発揮していくことになりました。その後「みえ環境大賞」をいただくなど実践が様々な分野から評価され、地域の方からも「学校の取組は地域の誇りだ。」と喜んでいただきました。

ＥＳＤに取り組む中で子どもたちの生き生きとした意欲的な姿を感じ、それが教職員の意欲・やりがいにもつながっていると感じています。

今日的課題の克服に向けて

『磨く　磨き合う』

亀山市立亀山西小学校
校長　若林　喜美代

一、本校の概要

本校は、亀山市の中心部である亀山城祉本丸に位置し、明治六年開校（一四三年）の伝統ある学校です。平成十八年三月に新校舎が建設され、今年で築後十年が経過しました。児童数五百五名（一月十日現在）で、特別支援学級三学級を含む二十学級、他に通級指導教室、日本語教室を置くなど、特別支援教育や外国にルーツを持つ児童の拠点校としての役割も併せ持っています。

また、本年度指導教諭が配置され教職員は意欲的でまとまりある一方で、担任教員の約七割が二十代という若い集団となっています。このような現状から、子どもたちの学び合いだけではなく、教職員も互いに学び合いを通して知識を得て技術を磨いていくことの大切さから、「磨く　磨き合う」ことを合言葉に学校運営を進めています。

二、今日的課題

本校の課題として、学力・体力の向上、いじめ・不登校の予防、児童虐待対応、特別支援教育・外国人児童生徒教育などの課題が山積しています。

さらに、新学習指導要領の改訂に向けて、社会に開かれた教育課程の実現をめざし、カリキュラム・マネジメント、アクティブ・ラーニング、道徳・小学校英語の教科化など教育改革の波がせわしなく迫ってきています。

このように、学校教育を取り巻く情勢は、多様化・複雑化・困難化する中で学校教育は主体的・対話的で深い学びの視点が求められており、学習過程の質的改善が重要視されています。

三、本校の取組

本校では、学習指導部・人権教育部・生活指導部の三つの部会の他、研修推進委員会及び学力向上推進委員会を持ち、各部長を中心に計画的に運営しています。

また、特別支援校内委員会を組織し、定期的又は緊急的に個々の子どもへの対応を協議し、いじめ・不登校、学習困難などへの初期対応、二次対応（生徒指導は二次的対応）を段階的に行っています。このことにより、通常の学級での特別な支援を必要とする児童に対し、個々の状況に見合った的確な対応が取れるようになっています。

さらに、「西小子ども文化」として、これまで築き上げてきた「多文化共生」「百人一首」「ジャスミン運動」など見直しを含めて継続していく必要があります。今年度は特に家庭での生活習慣の改善に向け、ＰＴＡと協力して講演会を仕組むほか、学力向上の取り組みとしても、学校図書館指導やＩＣＴを活用した授業実践を全校で継続して進めています。

四、地域・家庭との連携

本校には特色の一つである「二之丸塾」を中心とした教育協議会が組織されており、学校だけではなかなか経験できない大規模な行事を実施する他、解決が困難な事例について、地域の方の助言や協力を得るなど、地域連携が進んでいます。また、保幼・小・中の連携を大切にしており、特に保幼と小学校の段差を踏まえた保幼小連携交流を進めているところです。

五、チーム西小で

児童一人一人が楽しく充実した安心な学校生活を過ごせるように、するために、教職員一人一人が自分を磨き、そして互いに磨き合う仲間となる中で、若い先生も共に育っていく「チーム西小」による学校運営をこれからも進めていきます。

読書活動の推進を目指して、学校図書館の改革一年目

伊賀市立神戸小学校
校長　辻　喜嗣

中教審教育振興基本計画特別部会で、「子どもたちの読解力が低下傾向の中、特に中学生・高校生で一ヶ月に一冊も本を読まない生徒が多いなど、子どもの活字離れが指摘されており、読書活動の推進が課題」とされて十年が経過しようとしている。

【小学校図書館の現状】

本校は、昭和三十二年に建築された市内初のコンクリートの校舎である。そのため、図書館も古く、図書標準は確保しているが、古い図書が多く残され、昨年サミットの開催国のことを児童が調べたときに、なんと事典のほとんどが、ドイツが東西に分裂されたままであった。また、管理棟の一番奥にあり、わざわざ足を運ばなければならず、休み時間に開いた図書館は、ほぼ図書委員がいるだけの場所であった。

また、学力と連動することは軽々かもしれないが、読む力の弱い子どもが目立つ。全国学力・学習状況調査の点数だけを見ると、ある程度できているが、明らかに問題の内容を読み取れていないような回答も目にする。学年が下がればこの傾向が強くなる。すなわち、学習内容は記憶していても、何を問われているのか、問題を読み解く力が弱いように感じる。

【図書館の改革一年目】

①図書の総点検と、パソコンによる、バーコードでの管理
②古い図書の廃棄・更新
③図書館内の模様替え
④図書館の情報の発信

県内では、多くの学校で、バーコードでの管理が進んでいるが、

市から特別に予算がつかない状況下では、なかなか導入は困難である。本校では、地域で学校を支援していただく組織があり、助成していただくことで、導入できた。

次に、伊賀市では、学校の統合により、廃校となる学校が出たため、その学校の図書と、本校の図書を照合し、より美しい本をいただき、古い本を処分することで、更新を進めた。パソコンによる台帳の作成中であったので、程度のよい本を移管して、登録を行った。

背表紙が新しくなるだけでも、図書館はずいぶん明るくなった。そこで、図書委員たちも、休み時間に、図書館内で読み聞かせ会を行ったり、折り紙の本を使って、折り紙教室を行ったりしている。

私が、自宅で育てた観葉植物を持ち込んでいると、進んで水やりをしてくれる。このように、図書委員に図書館が自分のものという意識が生まれ、全校に活用を促す努力をするようになってきた。

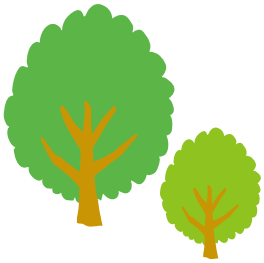
【地域との連携】

図書館の改革を学校便りに掲載し、保護者に配布するとともに、地域の回覧板で、全戸に見ていただいている。すると、児童書が届けられたり、読み聞かせ活動をしている方から読み聞かせボランティアの申し出があったりと、多くの支援をいただいている。

【今後の活動】

二学期末の学校評価アンケートでは、「家庭でも読書をしている」とした保護者の割合が五％増加した。読書は楽しいものであり、読書を好きにすることが、読書離れから子どもを救い、活字への抵抗感をなくすものだと考える。そのための拠点が図書館であり、心地よい空間であればあるほど、子どもが集い、自然に読書が楽しめるようになるのだと考える。

本校では、図書館の担当者は一人だが、図書好き職員数人で「図書館クラブ」なるものを自主的に作り、空いている時間に勝手に図書館の飾りや本の入れ替えを楽しんで（？）いる。貰った本などの整理が完了したら、打ち上げを行おうと盛り上がっているところである。



古くて新しい「生徒指導」

いなべ市立大安中学校
校長　森　憲　治

予防する生徒指導

私が教師になり、初めて配属された学校は、校内暴力の嵐であった。数年後に嵐がおさまった後、何とか予防できないかという思いから様々な研究会や発表会に通い、先輩方から学ぼうとした。

そんな時に出会ったのが、河村茂雄早稲田大学教授であった。学級集団の状況を可視化し、より良い集団を創り出していく取組であった。その読み取りツールが「ＱＵ」である。

カタカナで言われてもねえ・・・

取り組み始めた時には、散々であった。「カタカナで言うなよ。」などと言われたものである。

最近では、認知度も高くなり市町で取り組んでいる事も多くなってきた。

しかし、なかなか「予防する生徒指導」にまで至るのは難しい部分が多い。

成功しない「ＱＵ」

「成功しない」とまで言うのは言い過ぎかもしれない。ＱＵはあくまで測定ツールである。測定した結果をどう活かすかという部分が出来ていなければ、人間ドックに行ったきりで生活改善をしないのと同じことになる。

成功した「青山学院大学」

駅伝で有名になった青山学院大学は、メンバー全員が、自分で目標を考えて持ち〔自我関与〕、それらをメンバー間で交流し支援しあう〔相互支援・相互評価〕場を持っていることが強くなった原因の一つであると聞いたことがある。

組織で生徒指導を考える

取組が成功するかどうかは、先の〔自我関与〕と〔相互支援・相互評価〕ができる組織であるかどうかであると思う。

これらは、古くから言われていることである。しかし、時間がない学校現場にあって、どのように運営の工夫をしていくかが課題である。

日本版スクールワイドＰＢＳ？

「またカタカナか？」自分も最初は思ってしまった。

石黒康夫（逗子市教育委員会教育部長）さんが、中学校長時代に、荒れた中学校に赴任し、立て直した時の実践を理論化したものである。その点で、「学者が理論だけ言っている」ものとは違う。

日本版スクールワイドＰＢＳを簡単に紹介したい。

①望ましい行動に着目する

問題行動の除去ではなく、「どのような行動が望ましいのか」に着目する。これらを生徒も含めた学校全体で目標として強化していく。

②問題行動は階層化して対応する

問題行動に対しては一律に対応するのではなく、問題行動を頻度や深刻度により階層化し、それらに応じた対応を行う。

③自らが参加する〔自我関与〕

詳細は省くが、ルールや目標を、教師も生徒も全員が参加して自らが決める。この〔自我関与〕という部分を核にして運営していくのが一番の特徴である。

学び始めてはみたものの・・・

この方法を学び始めてまだ半年である。学校にはそれぞれ、それまでの伝統があり、何でも新しいものを取り入れれば良いというものではない。軽率な対応は学校を混乱させるだけで職員や生徒に迷惑をかけてしまう。

今は、密かに学んでいるが、数年後には、「日本版スクールワイドＰＢＳ」を一緒に取り組んでくれる仲間を県内各地に増やしていきたいと夢見ている。

県教育委員会との懇談会

「学力向上にかかる取組」「教職員の人材育成」をテーマに

平成二十八年十二月十三日（火）
於：県教育委員室

小中学校長会役員と県教育委員会教育長および幹部との懇談会が、県教育委員室において行われました。その概要について紹介します。

まず、森田校長会長からの、学Ｖｉｖａセットなどの学力向上に向けた支援、スクールカウンセラー及びスクールソーシャルワーカーの配置など生徒指導に関する配置、各地区の教育支援事務所の開設、県単加配の配置など、県教育委員会の支援に対するお礼を含めた挨拶で懇談会が始まりました。続いて、山口教育長から、全国学力・学習状況調査の成果に対して、現場の先生方への労いの言葉をいただきました。また、県予算の厳しい中、人件費の確保に向けての意欲をうかがいました。校長会に向けては、総勤務時間の縮減と女性登用推進への協力を依頼されました。

森田会長あいさつ

山口教育長あいさつ

次に、山口学校教育担当次長から「本年度の全国学力・学習状況調査の分析及び学力向上に向けての施策」について全国学力・学習状況調査結果分析報告書（ガイドブック）をもとに説明がなされました。

限られた時間でしたが、二つのテーマについて校長会役員から、各地区や学校での具体的な取組をもとにした発言を中心として、今後の校長会と県教育委員会との連携を深める懇談となりました。

〈山口学校教育担当次長の説明〉

本年度から、「みえの学力向上県民運動セカンドステージ」を展開しており、学校では、授業改善等の取組を深め、家庭・地域では生活習慣・学習習慣・読書習慣の確立の取組を広げるなど、県としても教育委員会だけでなく、様々なリソースを含めて取り組んでい行きたいと考えている。

本年度の中学三年生は、悉皆調査が始まった平成二十五年度の小学校六年生の時と比較してみると、全教科で平均正答率・無解答率ともに改善が見られ、質問紙においても同様に大きな伸びが見られる。

一方で、以下の事柄が課題として見られている。

・スマートフォン等の使用時間
・家での学習習慣
・自主的な読書の時間
・漢字の読み書き

本年度新しく就寝時刻に関する項目が設けられ、小学校では、基本的に就寝時刻が遅くなるほど、各教科の平均正答率も低くなる傾向が見られる。

また、新たに加わった質問項目で、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う」「先生は、授業やテストで間違えたところや、理解していないところについて、分かるまで教えてくれる」と肯定的に回答した児童生徒の割合が、全国に比べて相当程度高いことは、大変嬉しく励みになる。

県民運動の中でも校長会には、連携・協力願いたい。

〈意見交換〉

（一）「学力向上にかかる取組」

○三年ほど前から、三重の子どもたちの学力向上について校長会でも議論してきたところである。みえスタディ・チェックを導入していただきありがたかった。本校は、全教員で取り組み、採点や集計も行っている。そのことによって教員の意識も向上してきた。若い教員も、ワークシートをしっかり活用して成果を上げるなど、教員のモチベーションも向上してきている。

○学Ｖｉｖａセットを春休みの課題として生徒に配付布した。その結果として一定の成果が見られ、学Ｖｉｖａセットの問題の質の良さと効果を認識した。生活習慣・読書習慣チェックシートが非常にきめ細かく作られている。使用後に保護者から一言書いてもらい、担任も一言書き入れてフィードバックすることを重ねることによって変容が見られてきた。

○月曜日の六限目に課題別少人数指導を三段階のクラスで行っており、子どもにクラスを選ばせ、移動も自由にしている。そこでワークシートを利用しているが、子どもにも好評で、問題に挑戦する気持ちが出てきている。

＊教育支援事務所による支援

【南勢教育支援事務所】

小規模な中学校においては、教科を担当する教員が一名の学校があり、教育支援事務所の指導主事に普段の授業を見ていただき、色々相談する機会を得てありがたい。その学校や教員の状況や要望に応えてくれるオーダーメイドの支援をしてもらっている。

【紀州教育支援事務所】

紀州も各市町とも小さい教育委員会で、指導主事の人数も限られていてなかなか学校を回ることができない状況で、支援事務所の指導主事に師範授業をしていただいたり、研修会の助言もしていただいている。また、講師の先生にとっては校外での研修の機会があ

まりなく、毎月授業を見て、指導していただきありがたく思っている。指導主事要請回数の多さを見ても、どの学校も必要性を実感している。

【北勢教育事務所】

北勢地区小中学校二十二校に、三名の指導主事が、ほぼ毎日のように出向き、その学校の要望や課題を聞き、それに応じた支援をしてもらっている。フットワークの軽さから、指導主事要請の敷居も低く感じ、一人ひとりの教員に合った支援をしてもらっている。

（二）「教職員の人材育成」

○今年から三年間で退職する校長が七十％近くいる。県内の教員の五十歳代が四十％を超えており、この数年で、現場のベテラン教員の多くが退職してしまう。若手を指導する教員も少なくなってしまい、人事異動にも困る状況である。

また、管理職についての魅力がなくなってきており、女性管理職の希望も減ってきているのではないかと思う。

○時間的な束縛があるからか、教頭を希望する人が減っている。特に女性では、子育てと重なり管理職を敬遠する傾向がある。

○主幹教諭や指導教諭を若い年代から増やしていき、教頭選考試験に対する意欲を高めていく必要がある。

○今年、職務の見直しを行い、教頭と主幹教諭の仕事の整理をきちんとすることによって、教頭の多忙化を少しは解消することができてきている。

最後に、森田校長会長から懇談会のお礼の挨拶があり、終始和やかな雰囲気の中、本年度の懇談会が終了しました。

本部役員だより

一年を振り返って思うこと

三重県小中学校長会
中学校部会長　鏡　仁治

今年度は、五月二十六・二十七日に伊勢志摩サミットが開かれ、三重県が全国から注目された年でした。「子ども（小中学生）ふるさとサミット」の開催、「郷土三重を英語で発信！ワン・ペーパー！コンテスト」の実施をはじめ各小中学校で様々な取組が行われ、三重の子どもたちが、参加各国の文化のみならず自分たちの文化を見直す機会となりました。

教育界では、中央教育審議会が小中高の平成三十二年度以降の教育内容を決める次期学習指導要領の基本方針を文科省に答申しました。二十一世紀の社会は知識基盤社会であり、とりわけ第四次産業革命ともいわれる、進化した人工知能が様々な判断を行ったり、いろいろなことが、インターネットで処理されたりする時代の到来が、社会や生活を大きく変えていくとの予測がなされています。このような中、子どもが自分なりに思考したり、他者と協働したりしながら生きる力を育むことが大切であると指摘しています。

私たち校長は、これからの社会の変化を展望しつつ、教育について絶えずその在り方を見直し、改めるべきは勇気を持って速やかに改めていく必要があります。そして、従来よりも複雑化・多様化している学校の課題に対応していくためには、学校組織全体の総合力を高めていくことが重要であると考えます。

今年度も、三重県小中学校長会は学力向上を喫緊の課題とし、県教育委員会と連携しながら組織的な取組を進めました。全国学力学習状況調査では、小学校の「国語B」と「算数A」は全国の平均正答率を上回り、中学校の「数学A」は、全国の平均正答率に並びました。子どもがよりよく変容する「学校改革」は、「授業改革」が基本であると思います。校長のリーダーシップのもと教員の「意識改革」がなされ「授業改善」が進んだ結果であると言えます。今後も、私たち校長はすべての子どもが授業に参加し、活躍でき、理解できる取組を進めていく必要があります。

三重県小中学校長会は、教育の大きな転換期とも言える今、国や県・各市町が示す様々な教育施策について正しい情報を収集・議論し、組織力を生かし学校現場からの声を大切に教育の諸課題に立ち向かっていかなければなりません。子ども一人一人を生かす学校教育を視点に、一致団結して県民の信託に応えていきたいものです。

この一年、会員の皆様にご意見をいただき、県教育委員会をはじめ県内の教育関係団体との話し合いを積極的に進めてきました。ご期待に添えなかったこともあったかと思いますが、どんな時でも会員の皆様が支えて下さっていることをひしひしと感じ心強かったです。役員として無事務めることができましたことに心より感謝申し上げます。

私の薦める一冊

『兎の目』

桑名市立成徳中学校
校長　葛谷吉弘

今年で教師生活三十五年目を迎えた。退職も意識する中、初任の頃のことを振り返ることも多くなった。

当時の先輩教師から厳しくも温かく支えてもらいながら育てていただいたことに感謝をしている。

私の初任校は、小学校で、地域的に生活の厳しい子どもたちが多く通ってくる学校だった。五年生の担任となったが、心を開いてくれない子、やんちゃで叱ってばかりの子、忘れ物ばかりして宿題をやってこない子など、日々の子どもたちの指導に悪戦苦闘していた。

何不自由なく親から与えられて育ってきた私にとって、とまどうことばかりであった。

そんなとき、ある先輩の先生からこの本を読んでみてと渡されたのが、灰谷健次郎さんの「兎の目」という本である。児童文学書ということで本に親しんでみえる方にとってはご存じの方も多いことだろう。本を読むということが苦手な私だったが、主人公の大学を出たばかりの新任教師、小谷先生が、学校では一言も口をきかない鉄三と向き合い、子どもたちと一緒に成長していくという姿に魅せられ、いっきに読んでいったことを懐かしく思い出す。小谷先生の人間的な魅力にもひかれた。

先輩教師からの教えもあり、この本をきっかけにクラスの子どもたちと寄り添うことで、自身の価値観の転換に繋がった。

毎年、若い先生方との出会いがある。この「兎の目」という本をいつも紹介している。今の時代の教育にあっているかどうかはわからない。課題をもつ子どもへの指導やその保護者との関わり、クラスの仲間づくりなど、教員になったら誰もが戸惑い苦悩する場面でもある。若い先生方に校長として示唆する機会も多い。初任の頃は、子どもの目線までおりて、一緒に行動することで子どもの心をつかんできた。

この「兎の目」を薦めることで、初任の頃のように、曇りのない目で子どもと向き合うことができているかを問う機会となった。

随想

「天職」と・・・最後の一年で改めて思う！

鈴鹿市立神戸中学校
校長　杉嶋克之

以前に「天職とは、新たな課題が起こり追い込まれ、新たな挑戦をし、成長する職。新たな課題が起こらない職は、天職ではない」というような内容を読んだことがあった。

振り返ってみると、新採からの三年間は、理想とした「教師生活」であった。そして、四年目、学校が荒れ始め、瞬く間に凄まじい「荒れ」となった。テレビの一場面のようなことは、毎日、起きた。これで教師か？と何度も思った。今、思うと「チーム学校」になっていなかったことが原因だった。みんなが同じ方向で一丸となって指導することで徐々に落ち着いた。荒れを克服する「スキル」を身につけた。

次に体験したのは「生徒が自ら命を絶った」全国的にもどこにでも起きるという流れもあった。学校では道徳教育をしっかり進めていたが、尊い命を亡くした。当時の校長は、全てを一人で受け止めていた。荒れた時もいつも「前へ、前へ」出て、私たちの見本となっていた。自分が校長となった時、その姿は忘れたことはない。リーダーとしての自分の目標であった。

その後、十一年間行政を経験した。仕事量と責任は想像以上であり、「この仕事、子どものためになる」と言い聞かせ、毎日、仕事をした。思い出すのは、今ではどこの学校でも行っている職場体験である。最初の一校のスタートが大変であった。荒れがあった時代、事業所は難色を示した。そんな中、助けのロープが天から降りてきた。一人の校長先生が「職場体験しよう！」と地域にともに出向き、頭を下げ、事業所を確保した。鈴鹿市で最初の職場体験は心配の中、大成功となった。

そして、十一年ぶりに校長として現場に復帰。その四月に「虐待」で全国の話題となった。朝の九時から夜六時まで新聞社やテレビ局の訪問が続いた。教育委員会と相談して対応できないほど、報道関係は速かった。ちなみにこの時の必殺技は「生徒をさらに不安にさせますので・・・。」と言って学校側が主導権を握ることだ。

こうして、最後の年を迎えるわけだが、またまた体験したことない、教育的な課題に直面した。結論を言えば、自分や教員を守るために不退去罪、威力業務妨害で保護者を訴え、警察が学校に・・・。

最後の最後までその課題は新たなものであった。従って「天職」だったのではとつくづく思う。

もちろん、この天職は一人では全うできなかった。一番の支えとなった妻に感謝している。今後は妻に恩返しをしたい。ありがとう。

振り返れば感謝の思い

伊勢市立有緝小学校
校長　岩﨑眞市

まもなく三十七年間の教員生活が終わろうとしています。今年度に入って一つ行事が終わるたび、職場の人たちに、「最後の○○でしたね。」と声をかけられます。そのたびに「ああ、最後の年なんだなあ」と「退職」という気持ちが強まっていく自分がいました。

振り返れば、最初に赴任した度会郡南島町立吉津小学校を皮切りにずっと小学校教員生活を無事送ることができたことは、何より幸せなことだったんだなあと思いま

す。山あり谷ありの日々ではありましたが・・・。

たくさんの子どもたちと出逢い、試行錯誤の連続で、楽しい思い出もたくさんあります。また、良き先輩方にも恵まれ、赴任する先々でたくさんの事を教えてもらうことができました。また、同僚にも恵まれ、共に悩み工夫し指導に夢中になれたのもとても幸せなことでした。今にして思えば度会郡・伊勢市でのあっという間の教諭時代でした。一番の思い出は、伊勢市立早修小学校の校舎建築。プレハブ校舎に引っ越し、猛烈に暑い夏・冷凍庫のような冬を越し二度目の引っ越しを経てようやく新しい校舎に。しかし、たった一年で異動。これも教師の宿命ですね。

管理職になってからも温かい職場・良き職員に恵まれました。教頭最初の赴任地は志摩郡（二年目に志摩市に）浜島町立浜島小学校でした。その後伊勢市に戻り教頭二校、校長二校で務めさせていただきました。どの学校でも地域の皆さんの温かい支援や学校に対する愛情を強く強く感じました。

我々教員は、（人間は、と言ってもいいかもしれません）周りの人々のお陰でこうやって無事に過ごせているんだと、改めて実感しているこのごろです。

支えていただいた皆様に感謝しつつ、退職後は、私でも役に立つことがあれば、力を尽くしていきたいと考えています。

あの時、あの人

「出会いの場　学校」

紀北町立東小学校
校長　伊藤　青史

私は、この三月で退職を迎えることになりました。

私の初任の学校は、員弁郡藤原町立白瀬小学校。（現いなべ市立白瀬小学校ですが、今年度で閉校し、統合が行われると聞いています。）

初めて担任した三年生の三十数名の子どもたちは、なかなかのやんちゃ揃い。

エネルギーが有り余る子どもたちを落ち着かせようと毎朝、全員でランニングをしました。先輩方の教えを受けながらも、思い返せばずいぶん乱暴な学級経営でした。感情的に怒ってしまうこともしばしばでした。

その教え子たちが、昨年、白瀬での同窓会に誘ってくれました。教え子たちが、みんなとても心優しく立派な大人に成長していることに感動しました。

ある教え子は、怒ってばかりだった当時の私について、「自分のために真剣に叱ってくれていることが分かったから、自分が悪いと思っていた。」とフォローしてくれました。また、「先生にみんなでぶつかって投げ飛ばされる相撲が楽しくて、今でもその場面が夢に出てきます。」という話には驚かされました。

一方で、「先生にドッジボールの特訓をされて、手が痛くなりとても腹が立った。」と小学校の卒業文集に書いた教え子は欠席しており、謝ることができませんでした。

教師の言動が教え子の心の片隅にずっと残っていくことの責任の重さを痛感した再会でした。

管理職になってからも、力不足で大変皆様に迷惑をおかけしましたが、多くの人々に助けて頂いたうれしい思い出がたくさんあり、教諭時代とは違ったやりがいも感じることができました。

欠点だらけの私ですが、性懲りもなく、再任用教員として、四月から新しい生活に向かうことにしました。勉強のし直しです。

「あの時、あの人、あの先生と出会えて良かった」と子どもたちがいっぱい思えるような学校づくりのために、もう少し勉強を続けていきますのでよろしくお願いします。

「生きることの意味」

松阪市立西中学校
校長　川島　三由紀

「お久し振りです。お元気ですか。」と言いながら、大きな鉢植えを抱えて校長室に入ってきたのは、三年前のことでした。「二十年振りなのに、学校は全然変わってない、なつかしい！」校舎のあちらこちらを長い時間眺めていました。「実は俺、後三年なんさ。」と突然切り出しました。肺がんが見つかったが、かなり進行しており、すでに転移も認められ、ドクターから余命三年と告知されたというのです。どう受け止めていいのか、戸惑っている私に対して彼は「三年間と残された時間を教えてもらったから、三年を三十年分にして一生懸命、がむしゃらに生きるから見ていてほしい。」ときっぱりと力強く言いました。「中学校の時、先生にしかられたことを時々思い出します。お世話になった人、みんなにありがとうを伝えたいです。」と丁重に頭を下げるのです。担任としても十分なこともしてやれず、行き届かないことばかりでしたが、逞しく立派に成長した彼が誇らしく、このまま時間が止まってくれたらと願わずには居られませんでした。数日後「クラスの友達と会いたい」という彼の願いから集まれる者だけでもと、急遽同窓会が開かれました。その後、県外で暮らしている彼に私は、時々「生きてるの？大丈夫？」と電話で確かめました。「先生、心配せんでも大丈夫やよ。やりたいこともあるし、俺はまだ死ねやんから。」と明るく元気そうな声で応えてくれると、ほっと安心したものでした。その彼が、突然この一月一日に治療の甲斐無く呆気なく逝ってしまいました。わずか三十九年の生涯でした。近いうちにまた会えると思っていただけに喪失感というか、心にぽっかり空いた穴をどうすることもできずに居る私に、遺影の中の彼が、にっこりと微笑みます。最後の最後まで感謝の気持ちを伝え、決してあきらめることなく懸命に生きた彼に私は、改めて「生きることの意味と、いのちのすばらしさを身を持って教えてくれてありがとう。」と伝えたかったのです。空の上から見守ってくれている彼を感じながら、これからもしっかりと前を向いて、どんな時も感謝の気持ちを忘れずに生きていこうと思います。

地区校長会だより

三重郡校長会

三重郡校長会は、菰野町、朝日町、川越町三町の公立小学校八校、公立中学校四校の校長十二名で組織しています。

三重郡と言っても四日市市を跨いで海側と山側に位置しており、互いの地域性のちがいを感じながら、いつも交流を図っています。主な活動は以下の二点です。

①定例会

毎月一回定例会を行っています。

各町が隣接しているわけではないので、山側と海側を行き来するだけでも片道四十五分程かかります。そんな中ですが十二名の校長が一堂に会する機会を大切にし、毎回ほぼ全員参加で行っています。

定例会では、会長報告、県校長会代表者会報告、諸問題についての協議の他に、各学校の学校づくりビジョンの交流や教育活動の情報交換を行い、その後に小中学校に分かれて、部会を行っています。小中学校の校種を跨いでの学校づくりビジョンの交流や情報交換は、互いの理解に役立っており、各町に戻ってからも教職員レベルや児童・生徒レベルでの円滑な小中連携に繋がっています。

②研修会

年二回研修会を行っています。今年は七月に『社会が知らない虐待後の子どもたち』と題して児童家庭支援センター「まお」臨床心理士の中富尚宏さんからご講演をいただきました。また、十二月には三重県生涯学習センター所長の長島りょうがん（洋）さんによるご講演と生演奏で、『がんばっている校長先生方へ』のメッセージをいただきました。

たった十二名の会員ですが、昨年度末に六名の会員の人事異動がありました。異動の激しい状況は今後も続くと思われますが、互いの情報交換を密にし、連携を図っていきたいと考えています。

度会郡中学校長部会

度会郡は、平成十七年の市町村合併を経て、現在は玉城町・大紀町・南伊勢町・度会町の四つの町で構成されています。東は伊勢平野の南部に位置し、古来、伊勢本街道と熊野街道の分岐点として栄えました。南部は熊野灘に面してリアス式の海岸を有し、伊勢志摩国立公園に指定されています。また、中央には日本一の清流を誇る宮川が流れる自然豊かな地域です。

郡代表者会から町校長会へ

度会郡は地理的に会議開催には厳しい条件となっており、全会員（小十二校・中六校）が集合するのは、総会・前期研修会・後期研修会・人事対策総会の年間四回程度です。そこで町代表者会を開催し、郡校長会の事業検討や県代表者会の報告等を行い、四町の校長会で伝達する仕組みになっています。

「度会の教育」の継承

郡内では児童生徒数の減少による学校統合が進んでおり、現在、小中十八校で構成されています。ほとんどの活動は小中学校長が共に行っており、先人が築き上げた「度会の教育」（授業を中心に据えた教育活動）を受け継ぎ、発展させていくという姿勢は私たち度会郡の校長の使命であると捉えています。度会郡では、「小中学校授業研究」において、各校で行っている授業研究を郡内に公開し、授業を通して教育力と実践力を高めていくことを目指して、校長会が積極的に支援しています。

これからの校長会

学力向上の取組をはじめ、教員の時間外勤務の縮減、次期学習指導要領の改訂に向け、意見交換や研修を深め、活発な校長会運営を進めていきたいと考えます。

編集後記

子どもたちを包み込む柔らかな日差しに、春の訪れを感じる今日この頃となって参りました。このような中、皆様におかれましては、今年度のまとめや新年度に向けた新体制の準備にと、忙しい毎日をお送りのことと思います。

今年は、学習指導要領の改定に向け、周知のための説明会も開催される予定です。新しい学習指導要領の趣旨を踏まえた実践を通じ、情報化やグローバル化など急激な社会的変化の中でも、子どもたちが志をもって夢を実現していけるよう、必要な資質や能力を育んでいかなければなりません。私たちは、リーダーシップを発揮し、教育課程の編成、教職員の資質や意欲の向上、家庭や地域との連携体制の構築等、早期から基盤整備に着手していかなければならないと考えます。

さて、「校長会みえ」も計画通り、年三回の発行を無事に終えることができました。多忙な中での原稿の執筆や執筆者への原稿依頼等、ご協力いただきました皆様に感謝申し上げます。教育を巡る課題が多様化・複雑化する中、日々の対応に追われ、ともすると孤独感を感じてしまうことも少なくありません。心温まる記事にほっとしたり、課題解決に向けた情報を得たりと、改めて広報誌の大切さを実感しています。今後も誌面の充実を図り、皆様方から愛される広報誌となるよう努力してまいります。